

化膿性疾患用薬

製品群No. 56

資料4-35

リスクの程度 の評価	A 薬理作用	B 相互作用	C 重篤な副作用のおそれ	C' 重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ	D 濫用のおそれ	E 患者背景(既往歴、治療状況等)(重篤な副作用につながるおそれ)	F 効能・効果(症状の悪化につながるおそれ)	G 使用方法(誤使用のおそれ)	H スイッチ化等に伴う使用環境の変化	用法用量	効能効果			
評価の視点	薬理作用	相互作用	重篤な副作用のおそれ	重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ	薬理に基づく習慣性	適応禁忌	慎重投与(投与により障害の再発・悪化のおそれ)	症状の悪化につながるおそれ	適応対象の症状の判別に注意を要する(適応を誤るおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ)	スイッチ化等に伴う使用環境の変化			
		併用禁忌(他剤との併用により重大な問題が発生するおそれ)	併用注意	薬理・毒性に基づくもの	特異体質・アレルギー等によるもの	薬理・毒性に基づくもの	特異体質・アレルギー等によるもの			使用量に上限があるもの	過量使用・誤使用のおそれ	長期使用による健康被害のおそれ		
殺菌成分	レゾルシン 「純生」	レゾルシンは、石炭酸と同じく殺菌作用があるが、作用の強さは石炭酸の1/3である。局所的にタンパク凝固作用を有し、また角質溶解作用も有する。				頻度不明(顔面等、胃腸障害、悪心等、めまい、痺れん等、腎障害、メヘモグロビン血症、粘液水腫等)・長期使用・大量使用・経皮吸収によりこのような中毒症状があらわれることがある) ・頻度不明(真菌性・細菌性感染症)	頻度不明(過敏症)				・眼及び目の周囲には使用しないこと。 ・皮膚が徐々ににはく離するよう使用回数を制限すること。 ・毛髪に使用する際は、毛髪を洗い落とすから使用すること。	長期運用・大量使用・経皮吸収により、顔面等、胃腸障害、悪心等、めまい、痺れん等、腎障害、メヘモグロビン血症、粘液水腫等の中毒症状があらわれることがある	2~5%の軟膏、水溶液又はローションとして、適量を1日1~2回塗布する。	殺菌、鎮痛、表皮はく離、角質溶解剤として、次の疾患に用いる。 脂漏、脂漏性湿疹、被髪部乾燥、尋常性ざ瘡、肌腫性脱毛症
	イブプロフェンピコノール	ベンカム軟膏・クリーム	抗炎症・鎮痛作用を有し、抗炎症作用は、血管透過性亢進の抑制、白血球遊走抑制、プロスタグランジン類の生合成阻害、血小板凝集抑制、肉芽増殖抑制等の機序に基づくと考えられている			3%未満(接触皮膚炎、発疹、腫脹、刺激感、そう痒、水疱・糜爛、熱感、鱗屑等) 0.1%未満(その他の皮膚症状、症状の悪化、腫瘍、つばり感、皮膚乾燥)	過敏症				・眼科用として角膜、結膜に使用しないこと。 ・クリーム剤では、石鹸で洗顔後使用し、腫瘍の多発した重症例には他の適切な治療を行うことが望ましい。		①軟膏及びクリーム：本品の適量を1日数回患部に塗布する。 ②軟膏及びクリーム：本品の適量を1日1~2回患部に貼布する。 ③クリーム：本品の適量を1日数回石鹸で洗顔後、患部に塗布する。	①軟膏及びクリーム：急性湿疹、接触皮膚炎、アトピー皮膚炎、慢性湿疹、酒さ様皮膚炎、口囲皮膚炎 ②軟膏及びクリーム：帯状疱疹 ③クリーム：尋常性ざ瘡
	グリチルレチン酸	デルマクリン軟膏	グリチルレチン酸は急性炎症に対する抗炎症作用(浮腫抑制・ラット、肉芽腫抑制・ラット、抗紅斑・モルモット)を有する。抗炎症作用は主成分であるグリチルレチン酸の化学構造が「ヒドロコチゾン」の化学構造に類似しているところによると推定される。				5%以上又は頻度不明(過敏症)				眼科用として使用しない		通常、症状により適量を1日数回患部に塗布または貼布する。	湿疹、皮膚そう痒症、神経皮膚炎

化膿性疾患用薬

製品群No. 56

資料4-35

リスクの程度 の評価	A 薬理作用		B 相互作用		C 重篤な副作用のおそれ		C' 重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ		D 濫用のおそれ	E 患者背景(既往歴、治療状況等)(重篤な副作用につながるおそれ)		F 効能・効果(症状の悪化につながるおそれ)	G 使用方法(誤使用のおそれ)		H スイッチ化等に伴う使用環境の変化	用法用量	効能効果	
	評価の視点	薬理作用	相互作用		重篤な副作用のおそれ		重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ		薬理に基づく習慣性	適応禁忌	慎重投与(投与により障害の再発・悪化のおそれ)	症状の悪化につながるおそれ	適応対象の症状の判別に注意を要する(適応を誤るおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ)				スイッチ化等に伴う使用環境の変化
			併用禁忌(他剤との併用により重大な問題が発生するおそれ)	併用注意	薬理・毒性に基づくもの	特異体質・アレルギー等によるもの	薬理・毒性に基づくもの	特異体質・アレルギー等によるもの					使用量を超えるもの	過量使用・誤使用のおそれ	長期使用による健康被害のおそれ			
※殺菌成分、角質軟化成分	イオウ	日本薬局方イオウ	イオウは皮膚表面でも徐々に硫化水素やポリチオン酸特にペンタチオンとなり抗菌作用を現すので、寄生虫性皮膚疾患に奏効する。また皮膚角化に関係があるといわれる-SH基をS-Sに変えることによって角質軟化作用を示す。				頻度不明(皮膚炎等)、頻度不明(長期・大量使用又は高濃度の使用で皮膚炎)	頻度不明(過敏症状)		本剤に対し過敏症の既往歴のある患者(症状悪化)		患部が化膿しているなど湿疹、びらんが著しい場合には、あらかじめ適切な処置を行った後使用すること。			眼には使用しないこと。 ・長期・大量使用又は高濃度の使用で皮膚炎・長期間使用しても症状の改善が認められない場合には、改めて診断し適切な治療を行うことが望ましい。		適量、3~10%の軟膏、懸濁液又はローションとして1日1~2回適量を患部に塗布する。	疥癬、汗疱状白癬、小水疱性斑状白癬、頑癬、顔部浅在性白癬、黄癬、乾癬、ざ瘡、脂漏、慢性湿疹
※角質軟化成分	サリチル酸	サリチル酸	角質溶解作用、細胞間基質を溶解し鱗屑の剝離を促進して角質増殖皮膚を軟化させる作用がある。防腐作用、微生物(白せん菌類など)に対して抗菌性があり、その防腐力、石炭酸に匹敵する。				頻度不明(発赤、紅斑等の症状、長期・大量使用で内服・注射等全身的作用の場合と同様な副作用)	頻度不明(過敏症)		本剤に対し過敏症の既往歴	妊婦又は妊娠している可能性のある婦人、未熟児、新生児、乳児、小児	患部が化膿しているなど湿疹、びらんが著しい場合には、あらかじめ適切な処置を行った後使用。		広範囲の病巣に使用した場合：副作用があらわれやすいので注意して使用。 眼下用には使用しないこと。	長期・大量使用で内服、注射等全身的作用と同様な副作用発現のおそれ。 長期間使用しても症状の改善が認められない場合には、改めて診断し適切な治療を行うことが望ましい。		1.適量サリチル酸として、5~10%の絆創膏を用い、2~5日ごとに取りかえる。 2.2.2の濃度の軟膏剤又は液剤とし、1日1~2回塗布または散布する。小児：サリチル酸として0.1~3%、成人：サリチル酸として2~10%	1.疣贅・鶏眼・紅色糠疹、角質剝離。 2.乾癬、白癬(顔部浅在性白癬、小水疱性斑状白癬、頑癬)、癬風、紅色糠疹、角化症(尋常性魚鱗癬、先天性魚鱗癬、先天性手足皸裂症(腫)、タリエー病、遠山遠園状糠疹)、湿疹(角化を伴う)、口囲皮膚炎、掌跖膿疱症、ヘアラギ糠疹、アトピー性皮膚炎、ざ瘡、せつ、腋臭症、多汗症、その他角化性の皮膚疾患

化膿性疾患用薬

製品群No. 56

資料4-35

リスクの程度 の評価	A 薬理作用		B 相互作用		C 重篤な副作用のおそれ		C' 重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ		D 濫用のおそれ	E 患者背景(既往歴、治療状況等)(重篤な副作用につながるおそれ)		F 効能・効果(症状の悪化につながるおそれ)		G 使用方法(誤使用のおそれ)		H スイッチ化等に伴う使用環境の変化		
	評価の視点	薬理作用	相互作用		重篤な副作用のおそれ		重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ		薬理に基づく習慣性	適応禁忌	慎重投与(投与により障害の再発・悪化のおそれ)	症状の悪化につながるおそれ	適応対象の症状の判別に注意を要する(適応を誤るおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ)		スイッチ化等に伴う使用環境の変化	用法用量	効能効果
			併用禁忌(他剤との併用により重大な問題が発生するおそれ)	併用注意	薬理・毒性に基づくもの	特異体質・アレルギー等によるもの	薬理・毒性に基づくもの	特異体質・アレルギー等によるもの						使用量に上限があるもの	過量使用・誤使用のおそれ	長期使用による健康被害のおそれ		
※ 殺菌成分、角質軟化成分	レゾルシン	レゾルシン「純生」	レゾルシンは、石炭酸と同じく殺菌作用があるが、作用の強さは石炭酸の1/3である。局所的にタンパク凝固作用を有し、また角質溶解作用も有する。				・頻度不明(頻脈等、胃腸障害、悪心等、めまい、痙れん等、腎障害、メヘモグロビン血症、粘液水腫等)・長期連用・大量使用:経皮吸収によりこのような中毒症状があらわれることがある) ・頻度不明(真菌性・細菌性感染症))	・頻度不明(過敏症)		・本剤に対し過敏症の既往歴のある患者 ・皮膚結核、真菌性皮膚疾患、単純性疱疹、種痘疹、水痘の患者(症状悪化) ・乳幼児(経皮吸収による副作用発現)				・眼及び眼の周囲には使用しないこと。 ・皮膚が徐々に化膿するよう使用回数を制限すること。 ・毛髪に使用する際は、毛髪の石けん分を洗い落してから使用すること。	長期連用・大量使用:経皮吸収により、頻脈等、胃腸障害、悪心、めまい、痙れん等、腎障害、メヘモグロビン血症、粘液水腫等の中毒症状があらわれることがある		2~5%の軟膏、氷溶液又はローションとして、適量を1日1~2回塗布する。	殺菌、鎮痒、表皮はく離、角質溶解剤として、次の疾患に用いる。 脂漏、脂漏性湿疹、掻痒部乾燥、尋常性ざ瘡、粗癬性脱毛症

※ にきび治療薬